

## 体育科・保健体育科における資質・能力の育成

体育科・保健体育科では、子どもたちに身に付けていくべく資質・能力について、この数年間、継続的に議論を続けてきている。そのなかで、「わかる」「できる」「かかわる」という3点に着目してきた。体育科、保健体育科の体育分野の場合、どうしても「できる」という面にのみ目が向けられがちである。しかしながら、学び続ける子どもを育成していくためには、「できる」を支える「わかる」ということに目を向けていくことが重要だと考えている。技のポイントやコツを「わかる」ということは、「できる」ということに強くつながっていくとともに、今はできなくても「できそうな気がする」というように児童・生徒に運動に対する意欲を持たせることができると思う。さらに、「わかる」ことで、他の児童・生徒にポイントやコツを伝えあったり教え合ったりする「かかわる」ことが成立するのである。「わかる」ということを通して「かかわる」ことや「できる」ということを積み重ねていくことが、運動を好きになったり運動に親しんだりすることにつながっていくと捉えている。平成28年度の授業研究においては、これらの「わかる」、「できる」、「かかわる」に加えて、これらを支えるものとして、「伝える力」という資質・能力に着目をした。今まで、大切にしてきた3つの資質・能力をしっかりと関連させるためにも、自己の認知について言語化する力は重要な要素であると思う。中央教育審議会の答申においても、今回の学習指導要領改訂での大きなポイントの1つとして、アクティブ・ラーニングがあげられている。このアクティブ・ラーニングについて、溝上（2014）は、「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」と定義しており、こういった部分からも「伝える力」の育成も重要だということが分かる。

それでは、平成28年度の本附属学校園における体育科・保健体育科の研究授業では、これらの資質・能力の育成のためにどのような工夫が行われていたのかを検討してみたい。今回の研究授業では、小学校・中学校ともに、ベースボール型の教材を取り扱った。そのなかで、両授業ともに戦術学習、特にボールを持たないときの動きに着目して、授業を実施した。その課題に対して、攻撃のポイントから守備のポイントの知識を導き出したり、小学校は作戦ボードやマイチームテキスト、中学校は作戦ボードやタブレット端末などを活用して自分や仲間の動きを可視化したりすることで、解決を図るように試みていた。実際、守備のポイントといった内容知の獲得や様々なツールによって、自己の認知を外化しようという児童・生徒の様子を多く見ることができた。しかし、話し合いや教え合いの内容を詳しく探っていくと、内容が焦点化できていなかったり、ズレてしまったりしているケースも見受けられた。このことは、内容の焦点化の仕方や話し合い方といった方法知の不足が原因だと考えられた。そのため、次年度は、方法知へのアプローチをさらに取り入れ、今年度の成果の上に積み上げていきたいと思う。

（共同研究者：教育実践開発専攻、久保 研二）

### 【引用参考文献】

- ・中央教育審議会（2015）「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」
- ・溝上慎一（2014）アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換，東信堂